

主 題：栄光の希望を見失わないために7

聖書箇所：ローマ人への手紙 8章31-34節

今日はローマ8：31からです。先日、マスコミは拉致被害者の家族のニュースで盛り上がっていました。たくさんの方々がご覧になったことでしょうか。ご覧になって、皆さん、多分心が痛んだことと思います。また、もし、自分の身内にこのようなことが起こったらどうなっているだろうと考えませんでしたか？正直、私はそれを見ながら、なぜ、このようなことが起こるのだろうか？なぜ、神さまはこんなことをお赦しになるのだろうか？とずっと思っていました。そのときに、この経験を実際に味わっておられる横田姉の証を思い出しました。彼女はイエスを信じた後、毎日このように祈り始めたと言います。

「神さま、もし娘が活着しているならお守りください。」と。そして、信仰をもって10年後に彼女は娘が北朝鮮に拉致されたことを知りました。丁度、行方不明になってから20年目のことでした。そのときの証がこのように記されています。「生きていてくれた。やはり、神さまは祈りを聞いて娘を危険な地で守り、私を試みの中で信仰へと導いてくださった。何という奇しい20年であります。私は戦慄を覚える不思議な喜びを味わいながらも、拉致という大きな問題で新しい苦しみの中に置かれました。けれども、聖書に励まされ平安になりました。」、横田早紀江さんがお書きになった証です。私たちは当事者ではありませんから、その悲しみや痛みを知ることはできません。しかし、彼女がそのような大変な中であってキリストを信じる経験に至らせてくださった、そのことを、そして、そのように大変な中であつても、神がみことばを通して平安を与えてくださっていることを喜んでいて、それが私たち信仰者ではありませんか？私たちはこのような経験をするのではないかもしれませんが、日々、いろいろな経験をしています。その中で私たちは希望を失いそうになってしまう。どうして？という思いが私たちの心を支配してしまつて、希望が見えなくなつてしまいます。それほど、私たちの毎日の生活にはいろいろな問題があります。いろいろな困難があります。いろいろな迫害があるかもしれません。また、予期せぬ出来事がたくさんあります。病気になつてしまつたり、仕事を失つてしまつたり、事故に会つてしまつたりと、正直に言つて、私たちはこれまで信仰の希望を失いかけてしまつたことはありませんでしたか？強いと思つていても、いろいろな出来事に遭遇する度に私たちの心はぐらついて、私たちの心は悲鳴を上げるような状態に陥つてしまう…。

パウロは知っているのです。彼もそのようなところを通つて来たからです。すべてのクリスチャンがそのような弱さをもっていることを彼は知っています。そして、感謝なことに、私たちの主もそのことをご存じです。あなたがどのような存在であるか、あなたの信仰がどのような状態にあるのか、あなたがどれ程弱い者であるかというのは、感謝なことに神はご存じです。それらをすべて知つた上で、パウロがしたことは、「信仰者の皆さん、兄弟姉妹の皆さん、我々はどんなことを経験しても、その中であつて希望をもって生きることができる。そのために、神の為された偉大な救いのみわざを覚えること、神の愛を覚え続けることが重要である。」と言つて人々を励ました。私たちがいろいろな出来事に心を騒がせてしまつて、一瞬のうちに平安を失つてしまつて、心が心配であふれてしまうその原因は、私たちの目が見るべきところからそうでないところに向いてしまうからです。パウロはこのローマ人への手紙で、特に1-4章で、「救われることの大切さ」を述べました。私たちの罪深さを語り、そして、どうすればこの罪から解放されるのか、どうすれば私たちは生まれ変わり神の子どもとされるのか、そのことを言いました。5-8章では、「救いの保証」について語りました。恵みによって救われた者たちは決してその救いを失うことはない。

A. 私たちに対する神の働き (神の為された偉大な救いのみわざ) 31-34節

今日のテキストを見ると、31節には「では、これらのことからどう言えるでしょう。」と続いています。明らかなことは、これまで話して来たことを受けて、パウロはここから一つの結論を引き出そうとしていることです。「これらのことからどのような結論を引き出すことができるでしょう？」と、パウロはこの結論をもって、ローマのクリスチャンたちを励まそうとするのです。そして、このメッセージは私たちをも大いに励まします。私たちも彼らと同じように強い確信を持つことができます。今日、私たちはこの31-34節を通して、神が為されたその偉大な救いのみわざをもう一度振り返つて見ましょう。みことばを読みます。8：31-34「では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。：32 私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。：33 神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。：34 罪に定めようとするのはだれで

すか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしてくださるのです。」

パウロがこれまで語って来た、私たち信仰者が神からいただいた祝福、ある人は、この31節でパウロが言いたかったことは「8章の初めから彼が教えてきたことである」と言います。というのは、8:1から思い出しただくと、そこには信仰者にもたらされた様々な変化について、私たち新しく生まれ変わった者たちに与えてくださった様々な変化について、パウロは確かに教えてくれました。しかし、もう少し大きく見ると、31節の「これらのことから」ということばによって、パウロがローマ人への手紙の5～8章までに記してきた様々な祝福のすべてを振り返って結論を出しているように思えます。なぜなら、31節に「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」とあるからです。5:1には救われた私たちは「神との平和を持っています」とありました。「もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、」（5:10）と、ですから、確かに、これまで語って来た信仰者に与えられた数々の祝福を言っているのですが、31節のみことばを見ると、5章から記されて来たその祝福をもう一度振り返っているように見えます。順に見て行きましょう。

私たちの主が私たちのために為してくださったすばらしいみわざ、ここに、四つの疑問文、修辞疑問、レトリックが出て来ます。すべての答えはもう明確です。39節までを見ると五つあるのですが、今日は31-34節からその四つを見て行きます。パウロはこのような疑問を投げ掛けることによって、読者に確信を与えようとしています。

1. 神は私たちの味方である 31節

***第一問：「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう」**

→ 答え：「いいえ、だれも敵対できません」

敵対する人が多いというのが現実です。もう私たちが見て来たように、この当時もそうでした。どの時代にあっても、みことばに従って主の前に忠実に生きようとするなら、必ず反対が出てきます。今の時代でも、皆さんひとり一人の歩みにおいて、あなたがみことばに沿って歩んで行くなれば、あなたの生き方に対して、考え方に対して人々は反対します。最初は「ああ、すばらしい」と聞いているかもしれませんが、あなたが徹底して神の前に正しいことを選択し、それを実践して行こうとするなら、人々はあなたに反対します。イエスがそのように言われたし、イエス・キリストだけではなく、使徒たちの歩みを見た時もみなそうでした。みな迫害されて来ました。正直に言って、そのような状況に置かれることは辛いことです。なぜなら、私たちはみんなと仲良くしたいけれども、私たちが神を愛して、その神に従って行こうとする時に、必ずしもそのようにはなりません。人々から反対されることは辛いことです。それが親族やご近所の人であるならなおさらです。パウロはここで、どんなにあなたに反対する人、敵対する人がいても気にしてはならないと言うのです。

なぜなら、今話したように、私たちはこの世から反対されて当然なのです。この世の中は神に逆らい続けているからです。そんな中であって、あなたが神に従って行くなれば、世の中はあなたのことが邪魔なのです。反対して当然なのです。だから、パウロはそのような中であって恐れて妥協してはならないと言うのです。なぜなら、主があなたとともにいてくれるからとパウロは言います。かつて、あなたは神に敵対する者だった。しかし、神の恵みによって救われたあなたは、神の味方となり神の子どもとなり、神があなたとともにいてくれると。

先ほど、私たちが賛美した讚美歌267番は、ルターが詩篇46篇のみことばから記しました。「神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。」—、すごい約束だと思いませんか？「神はわれらの避け所」なのです。私たちがどんな時でも逃げ込むことができる要塞なのです。私たちの力なのです。力は私たちのうちにあるではありません。神の力が私たちに備えられているのです。「苦しむとき、そこにある助け。」だと言います。「46:2 それゆえ、われらは恐れぬ。たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。:3 たとい、その水が立ち騒ぎ、あわだっても、その水かさが増して山々が揺れ動いても。」、11節「万軍の主はわれらとともにおられる。ヤコブの神はわれらのとりでである。」と。私たちに勇気を与えるみことばです。私たちに力を与える真理です。神はこのようなお方でこんな約束を私たち信仰者に与えてくださったと。イザヤ書41:10のみことばを思い出しませんか？「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。」、信仰ゆえに様々な迫害に遭っていたローマのクリスチャンたちに対して、パウロは、あなたに敵対する人々がいて、いろいろな人があなたに反対するけれど恐れてはいけない、だれがあなたのそばにいてくれるか、だれがあなたといっしょにいてくれるか、その方を覚えなさい、全能の神があなたとともにいてくれる、こんなすばらしい祝福を私たちはいただいていると言うのです。

2. 神がすべての必要を与えてくださる 32節

32節に、神がすべての必要を満たしてくださると記されています。「私たちすべてのために、ご自分の

御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあります。」と。「ご自分の御子をさえ惜しまずに」とありますが、「惜しまずに」というみことばを見たとき、旧約聖書に記されているある出来事を思い出しませんか？創世記22章にあるアブラハムがイサクをささげた出来事です。そこには非常に大切なことが記されています。22：1－5「これらの出来事の後、神はアブラハムを試練に会わせられた。神は彼に、「アブラハムよ。」と呼びかけられると、彼は、「はい。ここにおります。」と答えた。：2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」：3 翌朝早く、アブラハムはろばに鞍をつけ、ふたりの若い者と息子イサクとをいっしょに連れて行った。彼は全焼のいけにえのためのたきぎを割った。こうして彼は、神がお告げになった場所へ出かけて行った。：4 三日目に、アブラハムが目を上げると、その場所がはるかかなたに見えた。：5 それでアブラハムは若い者たちに、「あなたがたは、ろばといっしょに、ここに残っていなさい。私と子どもとはあそこに行き、礼拝をして、あなたがたのところに戻って来る。」と言った。」、12節を見ると、アブラハムがまさに刀を振り下ろしてイサクをささげようとしたその時に、御使いは「あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。」と言います。

アブラハムが「惜しまずに」イサクをささげた様子です。アブラハムは神を愛するがゆえに、神のみこころに従おうとしました。親ですから当然葛藤はあったでしょう。自分の愛する者をささげることなどそう簡単にはできません。しかし、アブラハムの信仰を見た時に、彼は神を愛していました。もちろん、彼の信仰は、たとえ、イサクを殺しても、このイサクから子孫が増え広がって行くという神の約束だから、神はイサクをよみがえらせてくださるだろうと、そのような信仰をもっていたことがみことばに記されています。しかし、私たちがここで見ることは、神の命令に徹底して従ったこのアブラハムの信仰です。考えるなら、私たちの信仰はそこです。神のみこころにどのように従うかです。先ほどの賛美です。私たちが本当にみこころに従い続けて行くかどうかです。その実践をここに見るわけです。御使いは「あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。」とおもしろいことを言いました。ご存じのように、実際にイサクはささげられたかどうか、アブラハムが刀を振り下ろす前に御使いは「その子に下してはならない。」と言われました。そして、13節に「アブラハムが目を上げて見ると、見よ、角をやぶにひっかけている一頭の雄羊がいた。アブラハムは行って、その雄羊を取り、それを自分の子の代わりに、全焼のいけにえとしてささげた。」と記されている通りです。

これらのことを覚えながら、今日のテキストに戻っていただくと、32節のみことばに「私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が」とあります。この行為をされた方はだれでしょう？この行為の主語はだれですか？アブラハムはイサクを惜しみなくささげようとしてしました。主イエス・キリストを惜しみなくささげようとしたのは「父なる神」です。何のために？アブラハムは神を愛するがゆえにその行為を行なおうとしました。父なる神は私たちを愛するがゆえに、私たちのためにご自分の御子を惜しまずにささげてくださったのです。でも、イエス・キリストが十字架に架かる前に「止めなさい」という御使いの声はありませんでした。先ほど見たアブラハムの行為と、イエス・キリストの行為を見て何が違うのでしょうか？イエス・キリストは実際にご自分の罪のないのちをささげてくださったのです。イエス・キリストは実際にいけにえとなったのです。イサクはいけにえとなりませんでした。しかし、イエス・キリストはあなたや私の身代わりとなって、十字架の上でいけにえとなって死んでくださったのです。ですから、32節には「死に渡された」と記されています。死に引き渡されたのです。

私たちがすでに見たところですが、ローマ4：25に「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。」とあります。主イエス・キリストは十字架に架かる前に父なる神が「もういい」と言われて助けたのではなかった。父なる神は、主イエス・キリストをあなたの代わりに十字架に送ったのです。主イエス・キリストは実際にあなたの十字架を負って十字架に架かってくださったのです。主イエス・キリストの十字架はイエスの十字架ではなかったのです。彼の十字架はあなたの十字架でした。あなたの罪の刑です。父なる神は彼に私たちの罪過を、私たちに下った罪の裁定を負わせたのです。唯一、無実のお方が極刑を受けた私たちの身代わりとなって刑に服してくださったのです。この二つの違いをパウロはここで言うのです。イエス・キリストは父なる神によってこの世に送られ、あなたのために十字架で死んでくださった。その行為を父は「惜しまずに」為してくださったのです。あなたはこれほどに愛されているのです。私たちすべての信仰者のために、あなたのために神はここまで愛を示してくださったのです。

***第二問：「どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありますしょう」**

→ 答え：「必ず、すべてのものを恵んでくださる」

私たちの生活に起こるいろいろな問題や困難、苦しみ、時には病気になるってしまったり、仕事を失ってしまったりと、いろいろなことを経験する時に、確かに、私たちは神が遠くに思えるかもしれません。ずっと祈っていてもなかなか答えてくださらない、必要があるのになかなかその必要に答えてくださらない…、そうすると、私たちは神を疑うわけではなくても、少し信頼を失ってしまったりすることがあります。そのような時はどうすればいいのでしょうか？皆さんに大切なことをお教えしましょう。毎日、私たちの生活にいろいろなことが起こって来ます。正直言って、すべてがうれしいことばかりではありません。辛いこともいっぱいあります。その時に私たちがいつも吟味しなければいけないことは、自分の中に罪があるかないかです。というのは、聖書を見た時に、罪があれば神は懲らしめをくれます。それはあなたを愛するゆえです。ひょっとすると、あなたが経験しているすべてのことは懲らしめかもしれません。ですから、自らを吟味して、罪が示されたならその罪を神の前に明らかに告白することです。残念ながら、ここに完全な人はいません。失敗を繰り返す者たちが集まっているのです。しかし、私たちが失敗をしたなら、神の前に悔い改めて、そして、主に喜ばれることを継続して行こうとする、あなたがそのような歩みをしているなら、あなたの生活に起こっているすべての出来事はあなたのために神がしてくださっていることです。

そのことを私たちは8：28で見ました。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」、思い出してください、信仰者の皆さん。このみことばは私たちにこの世における祝福や快適さを約束したものではありません。なぜなら、私たちはこの地上にあってはいろいろな迫害を受けるわけです。いろいろな苦しみ、反対を受けます。だから、信仰者として生きて行く時に、残念ながら、この世の中は住みにくいところです。私たちはその中であって天を待望します。しかし、神はなぜ私たちがこの地上に置いているのでしょうか？神は私たちがイエスに似た者に変えようとここに置いてくださり、今日を与えてくださり、私たちのうちに働きを為してくださっているのです。この大変な地上にあって、物があってもなくても、思い通りに行こうと行かなくても、どのような状況の中でもあなたを最高に幸せな者にしてくれるのです。どういう意味ですか？神しか与えることのできない祝福であなたを満たしてくれるのです。イエスは豪華なものは何も持っていませんでした。しかし、豪華な生活、贅沢な生活をしている者たちが絶対に経験できない幸せを持っておられました。心はいつも喜びにあふれ、日々を満足しながら平安をもって生きておられました。私たち信仰者もそのような者として日々を過ごすことができる者に変えられたのです。ですから、私たちが覚えなければいけないことは、今、自分に起こっている様々な出来事は、決してマイナスなことではない、私にとって必要なことをしてくれているということです。

もし、体の弱さを覚えている人がいたら、あなたはその弱さを覚えるまでは神に頼ることを学ばなかったでしょう。私たちは自分の健康に過信しています。だんだん体の弱さを覚える時に、サプリメントに走るかもしれませんが、私たちがどんなに注意しても私たちに明日のことはわかりません。そうして私たちは神に依存して生きることを学んで行くのです。不景気な世の中です。なかなか仕事がない。今就活している方もたくさんいることを聞いています。そのように人間的に見ると可能性がほとんどないような社会にあっても、私たちは希望を持てるわけです。なぜなら、神がちゃんと私たちが導いてくださるからです。それは必ずしも来年の3月になったら仕事を与えられて4月から就職できると、そのことを保証したものではありません。神の約束とは、あなたが信仰者として成長し、神の栄光を現わす者としてすべてのことを用いてくださるということです。祈っていたら、神の前に喜ばれることをしていたら、必ず神が来年の3月までに…、そうかもしれないしそうでないかもしれない。でも、私たちにとって大切なことは、すべてのことを知っておられる神は、来年の3月に仕事を与えることがベストか、それとも5月に与えることがベストなのか、そのことも知っておられると覚えることです。だから、この方にゆだねることを私たちは学ぶのです。この方に信頼を置いて生きることを学んで行くのです。恐らく、私たちはこの地上における信仰生活において、そのことをずっと学び続けて行くのです。

なぜなら、頭では神に信頼して生きることのすばらしさを私たちはわかっています。でも、実際にそれを実践するというのは別のことです。でも、実践しないことには、私たちはこの神が備えてくれた喜びを経験することはありません。私たちは神がどんなに偉大なお方であるかということを知って行くために、いろいろなことを通して学んで行くのです。今あなたが置かれている状況は、その大切なレッスンをあなたが学ぶために、神が敢えて特別に備えてくれている。だから、信仰者の皆さん、問題を見て希望を失うのではなく、神の約束を見なければいけないのです。神はどのようなことを約束されたのか？みことばは、主はあなたを愛して、あなたのためにご自分のひとり子イエス・キリストを惜しみなく、あの十字架にあなたの身代わりに磔にしてくれた、そこまであなたのことを愛されたと教えています。その方があなたの日々の歩みにおいて、あなたが成長しあなたが栄光を現わすために、すべての必要を与えてくれないはずがあり得まじょうか？必ず与えてくれると言うのです。

私たちはこのような経験を踏まないと学ばない者です。問題がなければ、痛みがなければ、私たちは神を信頼していると言いながら、本当の意味での信頼を学んでいないのです。そして、苦しみに会った時に私たちは初めて、この大切なことを実感するのです。パウロがここで言ったこと、それはイエスの十字架を見てみなさい、どんなにあなたが愛されているかを見なさい、その方がちゃんとあなたのために必要なものを備えてくれるということです。もし、仕事を失った人がいるなら希望をもってください。あなたがそのような状況にあることを神は知っています。そしてその上で、どのようにあなたの必要を満たしてくれるのか、そのことを期待しながら主に従い続けて行くことです。

私たちの教会でも結婚を祈っている方がたくさんいらっしゃるでしょう。みこころが最善です。主は必ずみこころを為してくださる。私たちに必要なことは、忍耐をもって信頼を置いてその時を待つことです。そのために、もし神が結婚を許してくださるなら、あなたが本当に主の栄光を現わす夫として妻として歩めるように、自らの信仰をしっかりと鍛えて行くことです。みこころが為されます。病院に訪問させていただいたとき、いつも聞くことは「この病気を通して大切なことを学んだ。願わくは、病気を通してではなくそのレッスンを学べたらありがたいです。」ということです。でも残念ながら、今話したように、そのようなことを通らなければ私たちは学ばないところがあるのです。信仰者の皆さん、みことばの約束は、神はあなたを知った上で、何があなたに耐えられないことかも知った上で、あなたに必要なものを与えてくれているということです。希望を失ってははいけません。

3. 神があなたを選ばれた 33節

***第3問：「神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。」**

→ 答え：だれもいません。だれも訴えることはできません。

なぜでしょう？神があなたを選んでくれたからです。そして、あなたを義としてくださった。救ってくださったのです。私たちがすでに見て来た29-30節のみことばを思い出すと、神は一方的に人々を選び、その人たちを愛し、その人々がイエスに似るように定め、新しいいのちへと導いてくださり、そして、神の前に正しくされ栄光が約束されたということを感じます。すべてのことを神がしてくださり、こんな約束をくださったのです。信仰者の皆さん、この約束はあなたのために与えられたのです。神はあなたを選んでくれた。どういうわけか、神はあなたを愛して下さって、あなたを選んで下さって、そして、あなたをイエス・キリストに似た者に変えようと決めて下さって、あなたを救いへと導いて下さって、あなたを聖くして下さって、そして、あなたに栄光を与えると、これがあなたに備えられた「救い」なのです。このように神によって選ばれた者をいっただれが訴えることができるのか？だれも訴えることはできない。こんなすばらしい祝福の中に私たちは置かれているのです。

4. 私たちは神によって贖われた者 34節

***第四問：「罪に定めようとする者はだれですか。」**

→ 答え：だれもいません。

なぜなら、主イエスのみわざによってすべての罪が赦されたからです。まだ赦されていない罪があったら訴える人がいるでしょう。確かに、みことばが教えるようにサタンはいつも私たち信仰者のことを神の前で訴えています。黙示録12：10に「…私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えている者が投げ落とされたからである。」とあります。サタンが何をしているのか？あなたのことを父なる神の前にいつも訴えているのです。「こんな罪を犯したではないですか」、「こんなことを考えているじゃないですか」、「こんなことを口にしたではないですか」と。どんなに彼が訴えようと、もう主はあなたに対して無罪を宣言なさったのです。この判決は覆らないのです。感謝でしょう？私たちは自分の生活を振り返って、なぜ、こんなに罪ばかり犯すのだろう、なぜ、こんなことばかり考えるのだろうとまったく嫌になってしまいます。でも、感謝なことは、神はもうあなたを正しい、聖いと宣言してくださって赦してくださったのです。永遠に、すべての罪から。

イザヤはこんなことを言っています。イザヤ50：8-9「私を義とする方が近くにおられる。だれが私と争うのか。さあ、さばきの座に共に立とう。どんな者が、私を訴えるのか。私のところに出て来い。：9 見よ。神である主が、私を助ける。だれが私を罪に定めるのか。見よ。彼らはみな、衣のように古び、しみが彼らを食い尽くす。」、だれが私たちを訴えることができるか？もう神が赦してくれたのです。さばき主はただ一人です。創造主なる神です。その方の前に私たち人間はみな罪を犯しているのです。だから、さばかれるのです。そのお方があなたは聖いと宣言してくださった。もう私たちはさばかれないのです。この罪のさばきは私たちから永遠に取り去られたのです。だれも私たちを訴えることはできないのです。

34節には、イエス・キリストが成就された三つの「救いのみわざ」が記されています。

(1) イエスの身代わりの死

「死んでくださった方」、パウロはイエスはあなたのために死んだのだでしょうと言います。では、あなたのどの罪のために死んだのか？過去の、現在の、未来のすべての罪のために死んでくれたのです。あ

あなたのすべての罪の代価は支払われたのです。

(2) イエスのよみがえり

「よみがえられた方であるキリスト・イエス」、イエス・キリストはよみがえられたと言います。よみがえりはイエスのなされた身代わりの死があなたを救うに十分であるということの保証です。

(3) イエスの執り成し

そして、主イエス・キリストが何をされているか？「神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていただくのです。」、イエス・キリストはあなたを救いへと導いただけではありません。今、あなたのために祈ってくれているのです。ヘブル人への手紙7：25に「したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことができになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。」とあります。キリストはいつも生きていて、あなたのためにとりなしをしてくれていると言います。あなたのために祈ってくれているのです。サタンが訴える時に彼は執り成すのです。そのすべての罪のために私は十字架で死んだと。Iヨハネ2：1にも「私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の御前で弁護してくださる方があります。それは、義なるイエス・キリストです。」とあります。イエスが弁護してくれているのです。「この人の罪は赦された、この人は無罪だ」と。だから、パウロは言うのです。このようなみわざを神が為してくださり、また、為してくださっているゆえに、だれもあなたをさばくことはできないと。

この34節のみことばは私たちを非常に励ましてくれます。なぜなら、イエスは神の右の座にもうお座りになったのです。旧約聖書の幕屋の中を見た時に、幕屋で仕える祭司のために椅子はありませんでした。神殿を設けた時にもそこには椅子はありませんでした。なぜなら、彼らの働きは終わっていないからです。継続するからです。しかし、イエス・キリストはお座りになったのです。なぜですか？その働きが終わったからです。イエス・キリストは完全な救いを備えてくれたのです。まだ、これからも継続して罪人が救われるために何かをしなければならぬではありません。救いのために為されるべき働きは全部終わったのです。だから、イエスは神の右の座にお座りになったのです。救いのみわざが完成したからです。感謝だと思いませんか？私たちはイエスを信じるだけではなく、信じた後も一生懸命努力して最終的にその救いを自分のものに勝ち取らなければいけない？ではありません。違うのです。神の恵みによって救われた私たちはもう永遠に救われたのです。この救いを失うことはないのです。私たちに必要なことは、この神のなされた恵みのみわざをしっかりと覚えることです。こんな祝福が私たちに与えられたのです。信仰者の皆さん、そこを見なければいけないのです。それを覚えていなければいけないのです。この祝福、この約束は私に与えられたものだ。

あるひとりのアイルランド人の青年の話を読みました。1840年です。ちょうど彼は結婚を控えていたのですが、結婚式の前夜に彼のフィアンセは溺死しました。その後すぐに、彼はカナダに移住するのです。そして、仕事をしながら、残った時間は恵まれない人々や障害者のために一生懸命働きました。時には、必要がある人のために無償で働きをした、そんな人物でした。その後、再び結婚の機会が与えられて準備を進めている時に、このフィアンセも病で亡くなって行くのです。アイルランドに住む彼の母が病になった時に、彼は彼女を励ます手紙にある詩を添えました。決して、裏切らない天の友人のことを彼女に思い起こさせるためでした。彼自身が病の床にあった時、見舞いに来た彼の友人が彼の書いた歌詞を見つけました。友人はだれがこの美しい歌詞を書いたのかと尋ねました。彼はこのように答えています。「主と私との間でこれを書いた」と。それが、あの「いつくしみ深き」という讃美歌312番です。彼はこんな歌詞を書いたのです。

「私たちのすべての罪と悲しみを負ってください、イエスというなんというすばらしい友を私たちは得たのだらう。祈りにおいて神にすべてをもって行けることは、何というすばらしい特権なのか。おお、私たちは何と頻りに平安を失うことか、おお、私たちは何と不必要な痛みを負ってしまうことか。それは私たちが祈りにおいて神にすべてのことをもって行かないからだ。試練と誘惑を私たちは経験していないか？問題が至るところにないか？ 私たちは決して希望を失わない。祈りにおいて主の前にそれをもって行くことができる。私たちのすべての悲しみを共有してください、真実な友人を見つけることができるか？イエスは私たちのすべての弱さを知っておられる。祈りにおいてそれを主にもって行きなさい。私たちは多くの心配事に煩わされ、重荷で弱っている。尊い救い主は今も私たちの隠れ場。祈りにおいてそれを主にもって行きなさい。あなたの友人たちはあなたを軽蔑し、見捨てていませんか？祈りにおいてそれを主にもって行きなさい。彼の御腕のうちに彼はあなたをとらえ守ってください。そこにあなたは慰めを見出す。」

私たちにも理解できない悲しみの中にあっても、彼は主を見上げることを忘れなかった、主を信頼することを忘れなかったのです。ですから、彼は「どのような困難や悲しみの中にあっても、主イエス・キ

リストは私たちの友であって、必要な時に私たちに助けを与えてくれる。」と言ったのです。

信仰者たちはこのように生きたのです。神を見上げて、神の約束に立って、希望を失うことなく。信仰者の皆さん、希望を失っていませんか？主を見上げなければ、主に信頼を置かなければいけません。今、あなたが直面しているその状況は、あなたのために神が置いてくださったことです。それを感謝することです。喜ぶこと、期待することです。なぜなら、神は私たちの側にいてくださるからです。